

2019年度しあわせ研究

答えなどないと知りながら
問いの前に立ち続けること、
その可能性にかけてみる。

研究員 生井亮司

榎田二三子、義永睦子



COVID-19の感染拡大によって世界は未曾有の事態に襲われている。この原稿を書いている今、日本での緊急事態宣言は解除され、その流行の一波は去ったかのようにも見えるが、世界中では今もなお感染拡大を続けているし、日本においてもまだまだ予断を許すような状況ではないことは確かなことである。ところがこうした事態の中で人々はいち早く今までの日常や今までの経済活動を取り戻そうとする歩みを止めようとはしない。もちろんこうした事態がこれまで「当たり前」にあった日常の生活がどれだけありがたいものであったかを示したことはないし、そうした日常へといち早く戻ろうとするのは全く否定すべきことではない。しかし、世界的な未曾有な事態が露わにしたことは一体何であるのか、その事態が私たちに問いかけていることは何かということ立ち止まって考えてみることも、日常を取り戻そうとすることと同じくらい重要なことではないだろうか、と考えている。いや、むしろ今この只中でしか考えることができないことがあるのではないだろうか、ということである。

しかしながら、厄介なことに私たちがそれが何であるか、と問いかけなければならぬ相手は311の時も同様であったが目には見えない。そして、残念ながら、私たちがこれまで拠り所にしてきた生活の経験や学問的知識を持ってしても「正解」を語ることなど誰にもできそうにない。そう、人生において大切なことには「正解」などない、ということ私たちはすでに知っていたはずなのである。しかし、このように誰にも「正解」を語るができないという事態を逆説的に捉えてみるならば、確かにあるのは「問い」ということになる。そしてこの「問い」はあらゆるものとの関係の中に私たちを連れ出すことを可能にする。言い換えるならば「問い」を持ち「問い」に巻き込まれるということは世界との関係の中で思考するという意味すると同時に世界という流動体の中に「住まう私」を取り戻すことを可能にするのである。人類学の泰斗、ティム・インゴルドは人類学的な対話について「科学と呼ばれているものの大半よりも謙虚で、人間的で、接続的な方法、それは世界と結びつこうとするやり方である」と述べた。哲学対話も同様に問いの前に立ち続ける。だから立ち止まって「問い」と向き合うことは決して止まることではなく、変化し続ける世界と接続することを可能にするのである。